2025年度　入学試験問題

国　語

（第3回・グローバル入試共通）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、
　解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一九五七年に東京都港区の中学校教員だった桑田昭三が、学力偏差値を考案した。当初は教員の勘に頼っていた進路指導に、信頼できる指標を導入することが目的だったのだが、次第に偏差値は a 一人歩きし、偏差値そのものが勉強の目的となっていく。例えば英語の学習は英語が使えるようになることではなく、英語のテストの偏差値が上がることが目的となっている。偏差値そのものは、テストの点数が正規分布すると仮定される母集団のなかで、どの位置にいるのかを示す統計的な指標にすぎない。

本章では「偏差値で人の能力が測れるのか？」と批判したいだけではなく、そもそも「人間を数値化して比較することで、私たちは一体何をしていることになるのだろうか？」と問いを立てたい。それは①数値化・序列化がもたらすものを考えていくためである。

数値至上主義は偏差値に限った話ではない。社会に出たらあらゆる活動が数値で測られる。例えば大学教員である私は、毎年何本論文や著作を出版したのか、いくら助成金を獲得したのかを大学に報告する。業績の報告のあと、年度末に次年度の目標を立てて提出している。つまり目標と成果が数値で計測され評価されるのだ。民間企業に勤めている人たちは、もちろん私どころではない。

A

たとえば現在、医療の世界では「エビデンス（根拠）に基づく医療（ＥＢＭ）」が絶対的な価値を持つ。これは統計学的に病態を分析し、統計学的に有効であると認められた治療法を選択するという営みだ。一九九一年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した考え方である。

医療のエビデンスにはいくつかのグレードがある。もっとも確度の高いエビデンスは、患者を、ランダムに薬を投与する群と薬を投与しない群というように二つの群に分けて有効性を検討するランダム化比較試験（ＲＣＴ）を、さらに複数比較し、メタ分析した結果である。ＲＣＴの根っこには統計的な妥当性の評価がある。統計的に検討された複数の試験を組み合わせることで、妥当性を上げていく。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語りきれない。

再発がんが進行しているので「急に具合が悪くなる」可能性があるから、と緩和ケアを探すこ

とを主治医から勧められた哲学者の宮野真生子は、エビデンスにもとづく医療において常に問題になるリスクについて次のように述べている。

リスクと可能性によって、〔がんが再発した〕私の人生はどんどん［B］されていきます。しかも、病と薬を巡るリスクはたくさんありますから、そのなかで、良くない可能性が人生の大半の可能性を占めるように感じ、何も起こらず「普通に生きてゆく」可能性はとても小さくなったような気がしています。（中略）

でも、このリスクと可能性をめぐる感覚はやっぱりどこか変なのです。

おかしさの原因は、リスクの語りによって、人生が［B］されていくところにあります。そのとき患者は、いま自分の目の前にいくつもの分岐ルートが示されているように感じます。それぞれのルートに矢印で行き先が書かれていて、患者たちはリスクに基づく良くないルートを避け、「普通に生きていける」ルートを選び、慎重に歩こうとします。

けれど、本当は分岐ルートのどれを選ぼうと、示す矢印の先にたどり着くかどうかはわからないのです。なぜなら、それぞれの分岐ルートが一本道であるはずがなく、どの分岐ルートもそこに入ってしまえば、また複数の分岐があるからです。

エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには際限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。しかし確率が高いといっても「四〇％の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの六〇％の患者には効かない。つねに数値をめぐって患者は「効かないかもしれない」と不安な状態に置かれることになる。宮野はこの手紙から半年ほどのちに四〇代前半で亡くなったが、エビデンスに基づくリスク計算に追われてしまうと、人生の残り時間が確率と不安に支配されるものになってしまうだろう。

科学哲学者のイアン・ハッキング（一九三六―二〇二三）は、世界そのものが数学化したときに、世界は統計（確率）によって支配されることになったと書いている。

②世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統制可能で予測可能なものとなっていく。

アメリカのゴールデンアワーのテレビでは、（中略）露骨な暴力シーンよりも、確率について語られることの方が多いのである。新聞をにぎわせる恐怖が、確率を使って繰り返し語られる。その可能性〔偶然・確率〕chance があるのは、メルトダウン、癌、強盗、地震、核の冬、エイズ、地球温暖化、その他である。恐怖の対象は（たぶん）これらではなくて、実は確率そのものなのである。（中略）

このような確率の支配は、世界そのものが数学化されたところでのみ起こり得たものである。我々は自然に対して、それがどんなものであり、またどんなものであるべきなのか、根底的には量的な感覚を持っている。これは当たり前のことではなく、いくつかのささいな理由もあってたまたまそうなったのである。

統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの在処が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。当初、統計は世界のリアリティについてのある程度の傾向を示す指標と見なされていたが、次第に統計が世界の法則そのものであると考えられるようになった。統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものの位置を獲得するのだ。先のハッキングはいう。

たとえば一九八八年、日本が遂に世界一の長寿国になったことが注目を集めた。我々は、ちょうど日本企業が投資のための可処分資本を世界一蓄積しているのと同じくらいリアルに、平均寿命の伸びを日本人の生活や文化の現実的な姿と感じてしまうのである。

このように、「平均寿命」という単なる数字が日本を構成する事実そのものとなる。一人ひとりの日本人は早く亡くなることも長寿のこともあるのだから、「世界一の長寿国」というラベルが個人の余命を説明するわけではない。ましてや一人ひとりの高齢者が具体的にどのような暮らしをしているのかを示すわけではない。独居なのか、病院で寝たきりなのか、認知症なのか、もしかしたら元気なのか、同じ九〇歳でもさまざまだろう。

さきほど③エビデンスに基づく医学が患者を追いつめる様子を、がん患者であった宮野真生子の言葉で確認した。宮野の場合は自分で自分の病にかかわるリスクを気にしてしまうことが問題だった。

医療現場においてのみ、リスクが息苦しさをもたらすわけではない。学校や会社といった組織、そして社会全体は、リスクを予防するという視点でメンバーの行動を決め、行動を管理し、しばりつけようとする。「そんなことをしたら危ないよ」という注意を子どもの頃に受けたことがない人は少ないだろう。学校の生活はさまざまな校則でしばられていることが多いが、これらは大人が外部からなにか非難を受けないために、生徒をb あらかじめしばりつけるものである。子どものためと見せかけて、大人が自分の不安ゆえに子どもの行動を制限しようとしている。リスク計算は自分の身を守るために他者をしばりつけるものなのだ。

そもそもリスク計算を重んじる社会が生まれる前提として、社会学者のウルリヒ・ベックは、経済活動における個人主義、自己責任論による支配の問題点を挙げている。現代人はコミュニティによって守られることなく自分一人で自分の生活の維持に責任を負っているのであり、失敗があっても自分のせいなのだ。社会は個人を非難こそすれ守りはしない。自己の責任だけではない。「そんなことをして責任とれるんですか」という言葉を投げるときには他者を非難し、規範にし

ばりつけている。

個々人が責任ある行為者とみなされ、行為がもたらすネガティブな結果のリスクが計算される。さらには、そのリスクに責任を負うのは、国やコミュニティといった集団ではなく個人である。このような社会では、［　　C　　］。

このことは、人は外から強制されるのではなく自ら進んで、社会規範にしたがっていく身振りにつながる。高校生に規範意識を問うた大規模な調査でも、社会学者の平野孝典によると、現代の高校生は校則を守り、規則違反には憧れを持たないという結果が出た。

社会の実質が変化して「不確実でリスクに満ちた社会」になったというよりも、数値化されたことで社会や未来がリスクとして認識されるようになった。ともあれ、数値による予測が支配する社会、そして個人に責任が帰される社会は不安に満ちており、社会規範に従順になることこそが合理的なのだ。弱い立ち位置に置かれた人ほど、上からやってきた規範に従順になることでc サバイブしようとするだろう。

（村上靖彦『客観性の落とし穴』より）

問1　――線a～cのことばについて、文中での意味を考えた使い方として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a「一人歩き」

1　夜道を一人歩きする　　2　勤めた店をやめて一人歩きする

3　隣国の支配から一人歩きする　　4　噂話が一人歩きする

b「あらかじめ」

1　クラスの意見にあらかじめ賛成する　　2　次の課題をあらかじめ調べておく

3　出番が近づいてあらかじめ緊張する　　4　夕方になりあらかじめ潮が引く

c「サバイブ」

1　救助隊によってようやくサバイブされた

2　思い切って眼下の海にサバイブする

3　厳しい環境でサバイブする植物は少ない

4　君の意見にサバイブするつもりはない

問2　次のX・Y・Zを並べかえて空らん［A］にあてはめた場合の組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

X　つまり個人から組織、国家にいたるまで、子どもから大人にいたるまですべて数値で評価されている。数値に基づいて行動が計画・評価され、価値が決められるのだ。

Y　もちろん数値化されるのは人だけではない。自然と社会を含む森羅万象が一九世紀にいたって数値で測られるようになった。そして、この数値化は、統計学の支配という形を取ってきた。

Z　さらに、個人の問題だけではなく、学部としても次年度の数値目標を立て、年度末に達成状況を大学本部に報告する。大学全体でも同じデータ集めは行われており、各学部に作成させた六ヵ年ごとの中期計画のデータを集計して文部科学省へと報告して国からの評価を受けている。

1　Z→Y→X　　2　Z→X→Y　　3　X→Z→Y
4　X→Y→Z　　5　Y→Z→X

問3　空らん［B］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　分散化　　2　細分化　　3　分断化　　4　差別化

問4　――線①「数値化・序列化がもたらすもの」とありますが、それによって作られるのはどのような社会ですか。筆者の考えを六十字以内でまとめなさい。

（下書きらん）

10	30	50
20	40	60

問5　――線②「世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統制可能で予測可能なものとなっていく」とありますが、「統計学」の持つ意味の変化を述べた次の文の空らん［Ⅰ］・［Ⅱ］にあてはまることばを（　）内の指定字数に従って文中からぬき出して答えなさい。

統計学は［　　Ⅰ（二十五字）　　］から［　　Ⅱ（九字）　　］となった。

問6　――線③「エビデンスに基づく医学が患者を追いつめる」とは、どうなることをいうのですか。文中から二十八字でぬき出し、はじめと終わりのそれぞれ三字を答えなさい。

問7　空らん［C］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　未来のリスクを享受（きょうじゅ）して他者に抵抗（ていこう）しないことが、理想的な行動となる
2　未来のリスクを予測して利己心を譲（ゆず）らないことが、現実的な行動となる
3　未来のリスクを回避（かいひ）して他者批判を展開するのが、効率的な行動となる
4　未来のリスクを見越（みこ）して個人個人が備えることが、合理的な行動となる

問8　本文の内容として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　学力偏差値は、個人の点数がテスト母集団の中でどの位置にあるかを測ることを本来の目的としていたが、進路指導に利用されることで個人を序列化するものになった。
2　「エビデンスに基づく医療」にはそのグレードによって一定のリスクは生じるものの、より有効な診断方法や治療法であることは統計的に認められている。
3　個人主義・自己責任論の社会は、リスクを予防するという観点で個人が自身の身を守るために他者をしばりつける息苦しさをもたらす。
4　「平均寿命」という数字は個人の余命を説明するものではなく、その国に生きる人々の生活や文化の水準をリアルに表す指標のひとつである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上本文の上に行数を付してあります。

ぼくがロードレースと出会ったのは、十八歳のときだ。

当時、ぼくは陸上の中距離走をやっていた。自慢ではないが、インターハイで一位になったばかりで、次のオリンピックも狙えると言われていた。藤代高の白石誓と言えば、高校陸上界でそこそこ知られていた。

だけど、①走ることはぼくにとって苦痛でしかなかった。両肩にずしりと重しを載せられて、それを振り落とすために走っているような気分だった。だが、どんなに必死で走っても、重しを振り落とすことはできない。徒に記録がよくなるだけだ。

そして、そのいい記録はよけいにぼくを走ることに縛り付けた。やめたいと言ってもだれも取り合ってはくれないのだ。

やめることは、コーチや両親や友達などの期待や応援も裏切ることになる。そうやって、まわりの人を傷つけてまで、ほかにやりたいこともなかった。だから、ぼくはひたすらに走っていた。

そんなとき、ぼくは自転車レースと巡り合った。

深夜に何気なくつけたテレビで、一面の向日葵畑を走る自転車の映像が流れていた。

きれいだな、と最初に思った。もちろん、知識として、自転車ロードレースとかツール・ド・フランスなどというものが存在することは知っていた。

子供の頃から自転車は好きだったし、やたらに重い安物のマウンテンバイクも持っていた。だが、それは歩くのには少し遠いところに行くための道具でしかなかった。

テレビに映っていた自転車は、街を走っている多くの自転車とはa まるで違っている。ロードレーサーとか、ロードバイクという名前は知っているが、まじまじと見たのははじめてだった。

ぽきりと折れそうなほど細いフレームとタイヤ。それは恐ろしいほどのスピードで平地を走り抜けていた。ぼくのマウンテンバイクは、あんなスピードは出ない。

レースの展開は見るうちにわかってきた。どうやら、集団の中からふたりの選手が飛び出して、先行している。実況解説の話では、どうやら今日の優勝は、このふたりのどちらかに間違いないようだった。

選手はずっとふたりで走っていた。青いジャージを着た選手が前を走り、後ろにぴったり黒いジャージの選手が続いている。

なぜか、その黒いジャージの選手は青いジャージの選手の後ろから動こうとはしなかった。お互い少しでも、自分が先にゴールしようと思っているのなら、抜きつ、抜かれつ、で進んでいってもいいようなものだが。

青いジャージの選手はときどき振り切ろうとするかのようにスピードを上げるが、黒いジャージの選手はそれについてきてしまう。なのに前に出ようとはしないのだ。

すぐにその理由に気づいた。

マラソンでも空気抵抗というものがある。［　　X　　］。

レースの結果はもうわかった。ぼくは少し興味を失って、ソファに沈み込んだ。［　　Y　　］。

それにしても、不思議なのは、利用されていることを知りながら、前を走り続ける青い選手だ。

空気抵抗のことすら知らないほど愚かなのか。

ゴールまで残り一キロを切っても、その態勢は変わらなかった。解説者も、いつ、黒い選手が飛び出すかばかりを気にしていた。

それは、残り五百メートルを切ったときに起こった。黒い選手が、後ろから速度を上げて、青い選手に並んで、なにかを言った。

ふたりはがっちりと握手をした。

次の瞬間、飛び出したのは、疲れているはずの青い選手だった。ぐんぐん速度を上げて、黒い選手を引き離し、たったひとりで両手をあげて、ゴールへと飛び込んだ。

興奮する実況アナウンサーの声と、ゴールにいる人々の歓声が彼を包む。

少し遅れて、黒い選手もゴールインし、拍手と歓声に包まれていた。

ぼくは、ぽかん、と口を開けたまま、テレビを眺めていた。

いったい、何が起こったのかわからなかった。ぼくには、勝てるはずなのに、黒い選手が勝負を投げたようにしか見えなかった。でも、どうして。

八百長にしてはあまりにもb<u>あからさまだ</u>。

不思議なのは、こんなにあからさまに、勝負を捨てて取引のようなものが行われたのにもかかわらず、表彰台のまわりからは勝利を祝う歓声が上がり、アナウンサーたちも当たり前のように勝者を賞賛していたことだ。

そして、②<u>アナウンサーたちは黒い選手のことも褒め称えていた</u>。勝てる勝負を捨てたのに。

どう考えても納得がいかない。ぼくはテレビを消して立ち上がり、自室でパソコンを立ち上げた。

インターネットの自転車ロードレースファンが集まる掲示板を検索で探し、そこにアクセスする。

掲示板では、やはり先ほどのレースの結果で盛り上がっていた。疑問を呈する声はまったくなく、むしろ、「感動した」だの「いいレースだった」だのと言われていた。

ぼくは、半分怒りのような感情を覚えながら、掲示板に書き込んだ。あれは、八百長とは違うのか、いったいどうして、黒い選手は勝てるレースを投げたのだ、と。

返事はすぐにいくつも書き込まれた。

初心者であるぼくを、からかうような書き込みもあったが、ひとりが丁寧に教えてくれた。

ロードレースにはエースとアシストという役割分担があるのだ、と。

個人競技に見えるが、実は団体競技に近く、ひとりひとりが勝利を目指すのではなく、アシストの選手はエースを勝たせるために走る。その結果、自分の順位を下げることになっても。

今日のレースで、青い選手は自分が※ステージ優勝を目指すために走っていた。だが、黒い選手は、後ろの集団にいる自分のエースのため、ひとり飛び出した青い選手のことをマークする目的でついていったのだ。彼のチームのエースは総合でトップの位置にいた。

ゴール近くなっても、チームのエースは先頭のふたりに追いつくことができなかった。黒い選手のゆさぶりで、総合成績が変動するほどの差もつかなかった。もちろん、その時点で、黒い選手が優勝を目指すこともできた。そうしても、ルールとしては問題はないが、決してフェアな勝負ではアない。

黒い選手はこう考えたはずだ。

自分はアシストとしての仕事をcまっとうした。だが先頭交代をしイなかった自分に勝利の資格はウない、と。

だから、最後の五百メートルで並んだ瞬間に、そう言ったのだろう。

青い選手は全力で走り、実力で勝利をつかんだ。

黒い選手はチームのために走り、そして、最後にフェアであることを選んだ。

だからこそ、ふたりともが称えられているのだと、その人はぼくに教えてくれた。

ぼくは、礼を書き込むのを忘れて、③ぼんやりとパソコンの画面を眺めていた。

あの瞬間、行われたのは取引とかそういうものではエなかった。

勝利というものの尊さ、敵である相手を賞賛する気持ち、そして自分の胸に抱いた誇り。

黒い選手は、記録の上では勝者ではない。だが、彼は勝者と同じくらい誇らしい気持ちで、ゴールへと飛び込んだはずだ。

背筋がぞくり、とした。ぼくはすっかり乾いてしまった唇を舌で湿した。

この世界ならば、肩の重しを振り払って走ることができる。そう思ったのだ。

そう思ったからといって、実際に自転車ロードレースの選手になれるかどうかは、わからなかった。

そのとき、ぼくはすでに十八歳だった。たとえば、今から野球選手やサッカー選手になるのは絶対に無理だ。

だが、調べてすぐにわかった。自転車は技術的には、それほどハードルの高いスポーツではない。必要なのは、心肺機能と、足の筋肉の持久力と瞬発力。そして、駆け引きと戦略だ。

ツール・ド・フランスで七連勝という驚異的な記録を打ち立てたランス・アームストロングが自転車を本格的にはじめたのは、ぼくと同じ十八歳のときだ。それを知ったときは、鳥肌が立った。それまでも、他のスポーツで活躍して、身体はしっかり作っていたようだが、それならぼくだって同じである。

それから一週間も経たないうちに、自転車ショップに駆け込んで、ロードバイクを買っていた。

陸上で推薦が決まっていた大学を蹴って周囲を驚かせ、自転車部の強い大学に入った。

そして、大学を卒業すると同時に、スカウトされてチーム・オッジへと加わったのだ。
大学では、二年のときから実質チームのエースだった。だが、それでいい気になることなどできなかった。この狭(せま)い世界から出れば、自分よりも強い選手がたくさんいるはずだから。ぼくの目的はただ勝つことではなく、もうひとつ上のステージへあがることだ。
そして、ぼくの予想は当たっていた。
チームには石尾さんと伊庭がいる。ぼくは、彼らにはどうやってもかなわない。
だが、④そう思うことは決して不快ではないのだ。

（近藤史恵『サクリファイス』より）

※ステージ優勝……自転車ロードレースには、数日間かけて複数のレースを行う大会がある。ステージと呼ばれる日ごとのレースで順位を決定し、さらにすべてのレースのトータル所要時間で総合優勝を争う。

問1　――線a「まるで」・b「あからさまだ」・c「まっとうした」の文中での意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a「まるで」
1　絶対に　2　あたかも　3　微妙(びみょう)に　4　てんで

b「あからさまだ」
1　奇妙(きみょう)だ　2　唐突(とうとつ)だ　3　露骨(ろこつ)だ　4　簡単だ

c「まっとうした」
1　名乗りでた　2　終わらせた　3　努力した　4　遂行(すいこう)した

問2　――線ア～エのうち、文法上性質が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問3　――線①「走ることはぼくにとって苦痛でしかなかった」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
1　自分自身をみてほしいのに、世間の人々は陸上界の白石誓にしか興味を示してくれないから。
2　まわりの人の期待に応えなくてはいけないという義務感で競技を続けなければならないから。
3　どんなに個人記録が良くなったとしても、コーチや両親がその記録に満足してくれないから。
4　記録を向上させるために行う重りを用いた負荷(ふか)のあるトレーニングに嫌気(いやけ)が差しているから。

問4　文中の空らん［X］・［Y］には、それぞれ「ぼく」が考えたことが入ります。その内容をまとめた次の文の空らん［(1)］・［(2)］・［(3)］にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを後から一つ選び、番号で答えなさい。

［(1)］ジャージを着た選手は、空気抵抗を［(2)］て力を［(3)］しているため、レースに有利である。

1　［(1)］＝黒い　［(2)］＝減らし　［(3)］＝消耗（しょうもう）
2　［(1)］＝黒い　［(2)］＝受け　［(3)］＝消耗
3　［(1)］＝黒い　［(2)］＝減らし　［(3)］＝温存
4　［(1)］＝青い　［(2)］＝受け　［(3)］＝消耗
5　［(1)］＝青い　［(2)］＝減らし　［(3)］＝温存
6　［(1)］＝青い　［(2)］＝受け　［(3)］＝温存

問5　――線②「アナウンサーたちは黒い選手のことも褒め称えていた」とありますが、アナウンサーたちは黒い選手のどのようなところを褒め称えていたと考えられますか。「～ところ。」ということばにつながるように文中より二十九字でぬき出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問6　――線③「ぼんやりとパソコンの画面を眺めていた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　敗者であっても称賛を受けられる競技を見つけ、縛（しば）られながら走っていた自分を恥（は）じている。
2　勝敗を意識せずに走ることができる競技があることを知り、その奇抜（きばつ）さに衝撃（しょうげき）を受けている。
3　チームのために走り、自身の勝利よりも誇りを重んじることができる競技に心を奪（うば）われている。
4　自分が以前から追い求めていた走りができる競技を偶然（ぐうぜん）に見つけてしまい、憧（あこが）れを抱いている。

問7　――線④「そう思うことは決して不快ではないのだ」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　他の選手の実力に関係なく、純粋に競技そのものを楽しみ、自分の力を発揮できる場を見つけたことに満足している。

2　強い選手たちと切磋琢磨することを求めていた「ぼく」は、弱い選手がいる環境から離れたことに喜びを感じている。

3　エースの重責を果たす自信がないため、自分の代わりとなる有力な選手を見つけたことに安堵している。

4　自分が勝つことができなくても、強い選手をサポートしてチームの勝利に貢献できることにやりがいを感じている。

問8　この文章の表現に関する説明としてふさわしいものを次から**二つ**選び、番号で答えなさい。

1　13行目以降の回想場面を「深夜」という時間設定にすることで、語り手である「ぼく」のふさぎ込む心情を重ね合わせている。

2　73行目から86行目のように改行を重ねることで、「ぼく」が自転車競技に惹かれていくさまをテンポ良くあらわしている。

3　「青」や「黒」といった色彩ゆたかな表現を用いることで、読者が物語の情景をイメージしやすい工夫がなされている。

4　47行目「ぽかん」、85行目「ぞくり」などの擬態語を用いることで、物語に躍動感を持たせている。

5　86行目から87行目の間に空行を設けることで、「ぼく」の心情の移り変わるさまを明確に示している。

6　全体を通して主人公である「ぼく」の視点で語ることで、読者に「ぼく」の内面を伝えやすくしている。

3 次の詩および生徒たちの会話を読んで、後の問いに答えなさい。

歌　　中野重治

おまえは歌うな
おまえは赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな
風のささやきや女の髪の毛の匂いを歌うな
すべてのひよわなもの
すべてのうそうそとしたもの
すべてのものうげなものを撥き去れ
すべての風情を擯斥せよ
もっぱら正直のところを
腹の足しになるところを
胸さきを突きあげてくるぎりぎりのところを歌え
たたかれることによって弾ねかえる歌を
恥辱の底から勇気を汲みくる歌を
それらの歌々を
咽喉をふくらまして厳しい韻律に歌いあげよ
それらの歌々を
行く行く人々の胸郭にたたきこめ

（『中野重治詩集』より）

O先生　この詩が最初に雑誌に発表されたのは一九二六（昭和元）年です。関東大震災の数年後にあたり、さらに数年後には景気が大打撃を受けた大恐慌が起きていて、多くの人々が生活苦をかかえる、暗い時代だったようです。「擯斥」（七行目）は「排除してしりぞけること」、「韻律」（十四行目）は「詩のリズム」という意味です。

Aさん　なんだかすごく怒っているみたいだな。

Bさん　いきなり「おまえ（一行目）」って、だれのことなのだろう。

Cさん　「歌うな」と言ったあとで「歌え」とも言っているけれど、どっちなのかな。

Dさん　題名が「歌」なのだから、結局は歌っているわけだよね。

Aさん　「歌うな」と歌っている「歌」なのね。そりゃ、おかしい。

Bさん　それは、たぶん、「歌っていいこと」と「歌ってはいけないこと」の区別があるということだよ。

Cさん　なにそれ。なんでも歌いたいことを歌って、どこがいけないのさ。

Dさん　調べてみよう。「歌ってはいけないこと」は何個あるかな。

Aさん　「歌うな」と「歌え」とで、挙げてあるもののちがいがわかりにくいね。

Bさん　ちがいかい。「うそうそとしたもの（五行目）」は「歌うな」で、「正直のところ（八行目）」は「歌え」となっているよ。

Cさん　「ひよわなもの（四行目）」は「歌うな」で、「弾ねかえる歌（十一行目）」「勇気を汲みくる歌（十二行目）」を「歌え」となっているよ。強いか弱いかが関係ありそう。

Dさん　「赤ままの花（二行目）」というのは、よくある雑草のイヌタデのことだよ。お赤飯に似てるから、ちびっこのころ、ままごと遊びで使ったなあ。好きだったのに、どうしてダメなんだろう。

Aさん　好きであることはその人の自由だけど、歌うことがダメなんだな。

Bさん　好きな歌を歌ったらいけない場面は、けっこうたくさんあるよ。電車の中とか、試験中とかね。

Cさん　この詩の場合はどうなの。時間も場所も書いてないから、わからないよ。

Dさん　手がかりになりそうなところは、「たたかれることによって弾ねかえる（十一行目）」とか、「恥辱の底から勇気を汲みくる（十二行目）」とかいうところじゃないかな。身近な人や、自分が、たたかれたり、恥をかかされたりしている場面だったら、お気に入りのなつかしい赤ままの花の歌などを歌っている場合じゃないだろうし。

Aさん　そもそも歌うこと全部がダメだよ。事故現場とか、お葬式とか、戦場もね。

Bさん　そうかなあ。勇気をふるい立たせる歌もあるから、お葬式や戦場でも、内容や歌い方が適切なら、むしろ積極的に歌うことに意義がある場合もあるのでは。

Cさん　だから歌にも二種類があるってことか。歌い方にも、いい悪いがあるのね。

Dさん　「おまえは歌うな」の「おまえ」がだれなのか、それはわからないが、だれかに向かって「歌うな」と言う以上は、自分自身も当然歌うわけにはいかないはずだよね。そうだとすると、可能性の話として、語り手本人も「おまえ」の中に含まれてくるのじゃないだろうか。

Aさん　語り手自身のうちに、「赤ままの花」が好きだという自覚があって、しかし同時にこんなものの魅力に引き寄せられていてはだめだ、という自覚もある、ということなのかもしれないね。

問1　この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　口語自由詩　　2　口語定型詩　　3　文語自由詩　　4　文語定型詩

問2　この詩に用いられている表現技法として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　体言止め　　2　倒置法（とうちほう）　　3　擬人法（ぎじんほう）　　4　反復法

問3　――線「歌ってはいけないこと」として詩の中に挙げてあるものに共通する特性として**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　なつかしい幼少期の記憶（きおく）につながるもの
2　実生活の役にはあまり立たないもの
3　なんとなく魅力的で美しいもの
4　弱々しくてたよりないもの
5　伝統的で格式の高いもの

問4　この詩について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　語り手には、自分や仲間がたたかれたり、恥（はじ）をかかされたりしたことに対するくやしさがあり、それらの加害者を「おまえ」と呼び敵視している。
2　語り手は、ぎりぎりのところで傷ついたり苦しんだりしている人々への強い共感をもち、「おまえ」とは無関心に通り過ぎる人々を指している。
3　「おまえ」とは語り手本人をもふくみ、やさしい風情の魅力に引き寄せられがちな人々に、もっと優先すべきことがあるといましめようとしている。
4　「おまえ」とはこの詩の読者であり、あえてなつかしい美に対する憎悪（ぞうお）を強い言葉で語ることによって、無関心な読者から情熱を引き出そうとしている。

問5　生徒たちの会話のうち、詩の解釈（かいしゃく）として**ふさわしくないもの**が一つあります。その意見を言った生徒を次からひとり選び、番号で答えなさい。

1　Aさん　　2　Bさん　　3　Cさん　　4　Dさん

4 次の問いに答えなさい。

問1 次の各文の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

1 アツかましいお願いを聞いてもらう。
2 ギャッキョウでこそ人としての真価が問われる。
3 退職し晴耕ウドクの生活を送る。
4 主役をコウエンし数々の賞を総なめにする。
5 彼らはいつも仲間同士でハンモクしている。

問2 次の1～5のA・Bの文中の空らん□には、同じ漢字で意味・読みの異なる熟語が入ります。解答らんの字数に合わせてそれぞれ漢字で答えなさい。

1
A 彼は一番の年長者なのに、本当に□ない人だ。
B 若者に□のアイドルが電撃入籍した。

2
A ゴミは種類ごとに□して捨てなければならない。
B 中学生になったら□をわきまえて行動しよう。

3
A 世界遺産に登録後爆発的に□客が増えた。
B 決勝のカードは華麗な技の出し合いが□だ。

4
A 上空の□の影響で、ところにより雪になるでしょう。
B 風邪を引いたのか、部屋は暖かいのに□がする。

5
A 被害者のプライバシーに配慮して、□を用いる。
B 子供でも読めるように□で書く。